

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 縄文時代における生殖と移住： 小林達雄の土器『様式圏』の検証

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: マーク J., ハドソン メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00002000">https://doi.org/10.15021/00002000</a>

# 縄文時代における生殖と移住

小林達雄の土器『様式圏』の検証

マーク J. ハドソン  
筑波大学大学院地域研究研究科

- |            |        |
|------------|--------|
| 1 『様式』の概念  | 3 分析結果 |
| 2 婚姻ネットワーク | 4 考察   |

## 1 『様式』の概念

縄文研究に携わる研究者すべてに使われているわけではないが、小林達雄の『様式』の概念は縄文研究において非常に強い影響力を持っている。小林によれば、「土器様式は、いわば範型をデザインする際の流儀であり、その流儀にのっとってつくり出された複数の型式を含んでいるのである」(小林 1996: 29)。『様式』という概念そのものは全く経験的なものであって、理論的な基礎はない。ある「雰囲気をもった土器」というのが小林が書くものにおいてもっとも頻繁に使用される表現である(例えば小林 1989: 250)。小林にとって『様式』とはまずイデオロギー的な概念を反映している(小林 1984: 19-20)。彼がいうには、『様式』とはまず共有されたイデオロギーや世界観を表しており、オーストラリアのアボリジナルのドリーミングにかなり近いという(小林 1996: 52-53)。「土器様式圏が、単なる同じ気風の土器製作集団という次元を越えて、同じ観念、イデオロギー、ひいてはコスモロジーを共有する集団を意味するものであることが理解できよう。すると、そうした集団は一つの部族であった、といえるかもしれない」(小林 1996: 53)。小林は、『様式』は実際の社会集団に直結しているはずであると主張し、またその著作の中で『様式圏』なるものの社会的な意味合いを様々に示唆している(小林 1984; 1996: 50-52)。まず彼は1979年の著作で『様式圏』と通婚圏との間に関係がありそうだとすることを示唆した(小林 1979: 70)。1999年の著作では、土器型式の広がり(その型式のいくつかが一つの『様式』を生み出す)が、土器製作の共通のモデルや版型を共有する社会集団の拡散によって引き起こされるのではないかと論じている(小林 1999: 75)。彼がいうには、この広がりには婚姻パターンとリンクする可能性があるという(ibid.)。

縄文時代の『様式圏』が生殖ネットワークとリンクする可能性があるというこの仮説は縄文時代関係の諸論文ではほとんど扱われていないが、その検証はそれほど難しいことではない。本稿の目的はこの仮説を検証することにある。

小林は最新のまとめでは75の『縄文様式』を提唱しているが(小林 1999: 74)、本稿で

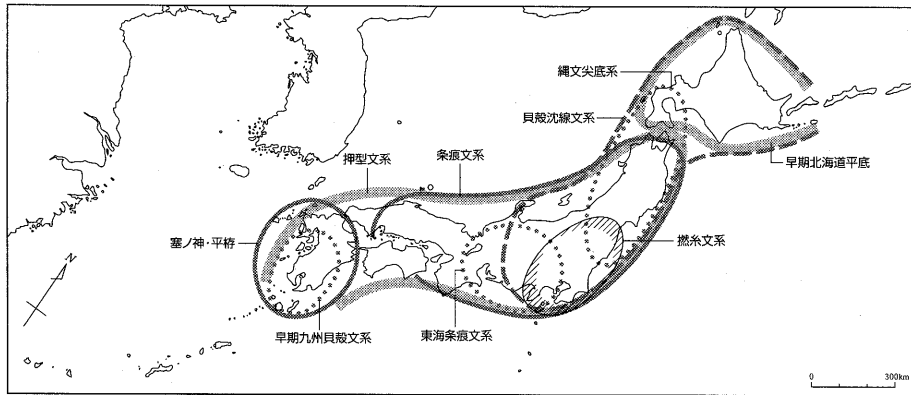


图 1-1 早期縄文土器様式圏 (小林 1989: 256)

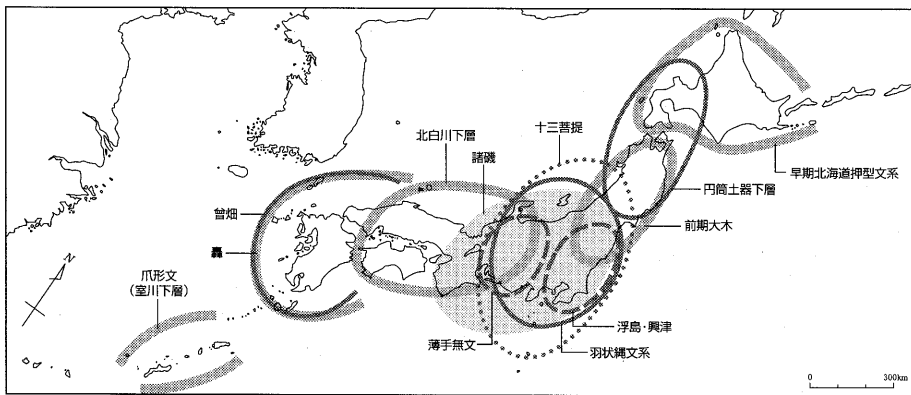


图 1-2 前期縄文土器様式圏 (小林 1989: 256)

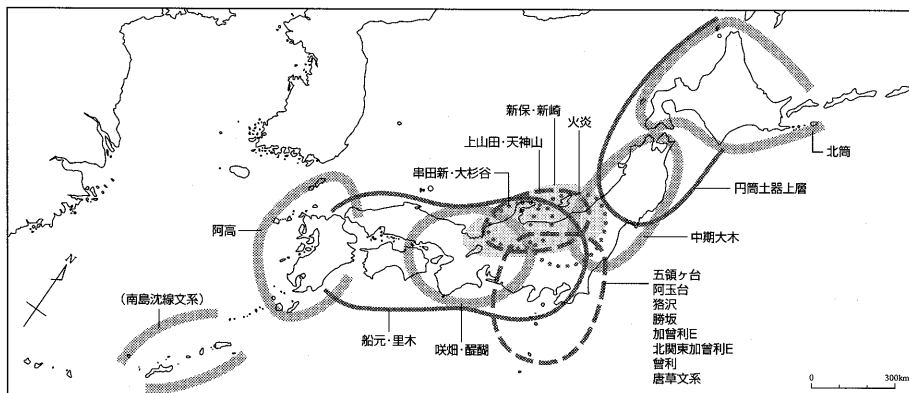


图 1-3 中期縄文土器様式圏 (小林 1989: 257)

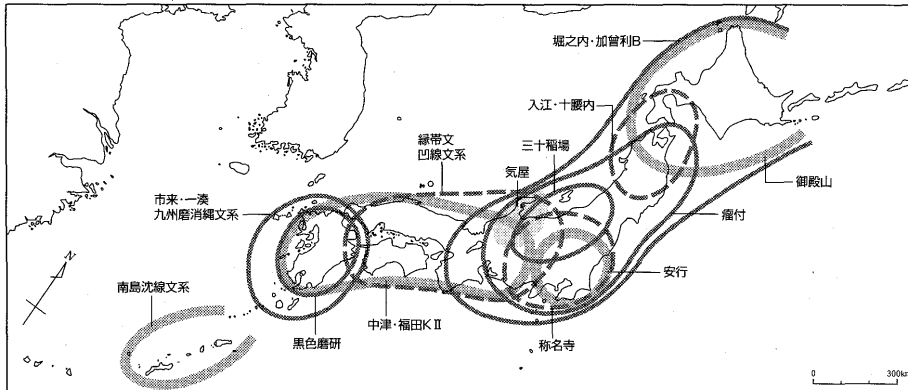


図1-4 後期縄文土器様式圏 (小林 1989: 257)

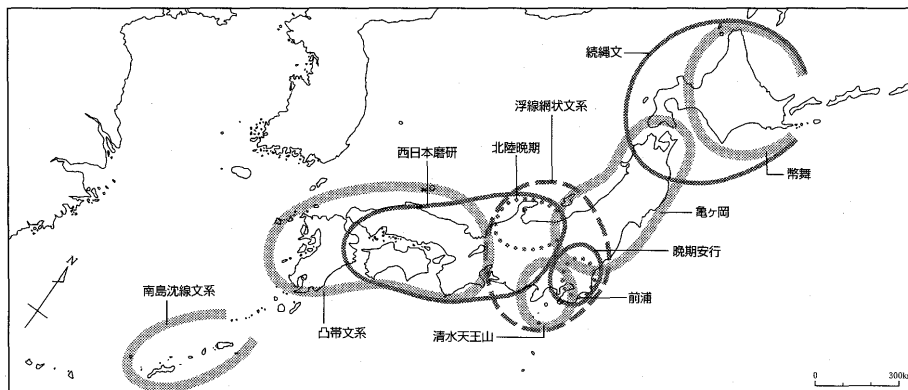


図1-5 晩期縄文土器様式圏と続縄文土器様式圏 (小林 1989: 257)

は『様式圏』の詳しい分布地図を載せた彼の以前の著作を用いることにする。それによれば、縄文時代を通じて64の『様式圏』が存在し、時代ごとに分ければ早期に9、前期に12、中期に19、後期に13、晩期と続縄文時代に11の『様式圏』が設定されている (小林 1989: 256-257)。ただし、これらの地図では各時代の中の異なる時期にあった『様式』が重ねあわされているという点に注意しておかなくてはならない (図1-1~5)。

## 2 婚姻ネットワーク

狩猟採集社会の領域に関するいくつかの研究において、人口密度と十分な数の潜在的な結婚相手を探し当てるために動かなければならない距離との関係が提起されている (Yengoyan 1968; Wobst 1974; Jochim 1976; Hewlett *et al.* 1982; Mandryk 1993)。D. H. マクドナルドと B. S. ヒューレットは5つ狩猟採集集団と6つの畑作農耕集団のデータを用いて通婚距離と人口密度との間に関係があるという仮説を検証した (MacDonald and

Hewlett 1999)。彼らはこれらの11のグループにおいて両者の間に強く重要な相関関係を見出し、さらに狩猟採集集団の方が畑作農耕集団よりも相手をさがすための距離が遥かに大きいことを見出した (MacDonald and Hewlett 1999: 504-505)。これらの結果から言えるのは、生殖ネットワークの大きさは人口密度に依拠しながら変化するという点である。したがって我々は、縄文土器の型式の地域的広がりがきわめて大きく変動することを理由にして、それが婚姻ネットワークと常にリンクしていることはありえないとする上野の仮説 (上野 1986: 55) をただちに放棄することができる。土器型式の空間的な広がりは、もし通婚距離とリンクしていれば、十分に变化しうるのである。

分析に先立って指摘しておかなければならないのは、『様式圏』はその大きさからいって、狩猟採集社会の民族誌的研究で広く知られるような社会単位との関係性を示すのが難しいという点である。小林達雄が規定した『様式圏』の定義によれば、それは極めて大きい (図2)。圏の直径 (一つの圏の最大径) の平均は513kmである。各圏は北海道、九州、東北などといった日本列島の地方区分に匹敵する。統縄文のケースでは、その『様式圏』はまたその時代の考古学的な文化圏にも一致する。したがって、ほとんどの場合『様式圏』は、ウォブストのような狩猟採集社会研究者が提起したおよそ500人規模の「最大バンド」(Wobst 1974) にくらべてもはるかに大きい。さらに、量的な計算をしなくても、人口密度と『様式圏』の大きさとの間に全く相関関係がないことは明白である。

各圏の平均的な直径は、人口規模が縄文時代全期間を通じてかなり変化しているにも関

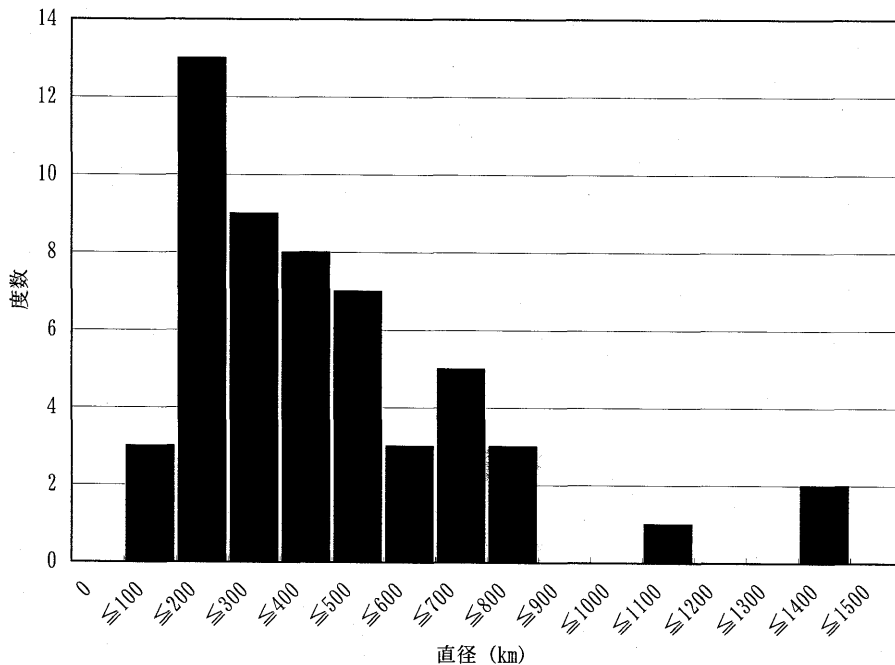


図2 様式圏の大きさの度数分布

ならず、縄文時代の各時代区分（例えば後期、晩期など）の間で、あるいは東日本と西日本といった地域的区分の間で驚くほど類似している。人口は常に西日本より東日本の方が大きい、『様式圏』の直径は縄文時代晩期を除いて常に西日本の方が小さめである（図1-1~4）。縄文早期以来の全縄文時代を通じて最も小さい『様式圏』は本州中部に見られる。この地域は比較的高い人口密度を誇り、それは縄文中期にピークを迎えるが、『様式圏』が小さいことは人口が激減する縄文晩期でも変わらない。小林の記述によれば、もっとも小さい『様式圏』の一つは東関東の「前浦式」で、それは縄文晩期の時代に利根川と霞ヶ浦の間の狭い地域に見られた。すなわち、この様式は東北地方から部分的には北海道南部までを覆った「亀岡式」と同時代なのである。しかし、その時代関東地方の人口密度は全体として東北地方の半分にも満たなかった。

『様式圏』と通婚圏との関係の可能性を検証するために、小山修三の縄文時代の人口密度に関するデータを使って、回帰分析を行ってみた。「通婚距離」とは普通、結婚相手の出生地間の平均的な距離、あるいは両親と子供の出生地間の平均的な距離であると理解されている（MacDonald and Hewlett 1999: 503; Cavalli-Sforza 1999: 515）。本稿では『様式圏』の最大径を小林（1989: 256-257）の地図から割り出し、通婚距離の近似値として使用する。すべての人が相手を探すためにこの直径で表される距離を旅していたわけではないことは明白であるが、『様式圏』が本当に生殖ネットワークを含んでいるとすれば、通婚距離の平均値は『様式圏』の大きさと相関するはずである。

### 3 分析結果

回帰分析の結果は図3と図4に示した通りである。図3では、小山が計算した人口密度と対照するように、縄文時代の早期、前期、中期、後期、晩期と各時期ごとに日本全域から『様式圏』を選び、その直径の平均値を落とした。人口の見積りでは北海道は除かれている。というのは、そこは小山のデータには含まれていないからである。しかし、もっと代表的な平均値を得るために、圏の直径の平均値の方には北海道の諸様式を含めてある。というのは、多くの圏が東北北部から北海道南部にかけてまたがって広がっているからである。図4では地域と一致するような、したがって小山のデータを使って人口を割り出すことができるような『様式圏』を使っている。そこでは次の10の様式が使われている。すなわち、押型文系、塞ノ神・平楯、前期大木、阿高、中期大木、市来・一湊・九州磨消縄文系、九州黒色磨研、中津・福田KⅡ、後期瘤付、凸帯文系である。

両分析からいえるのは、圏の直径と人口の間の相関関係は極めて低いということである。図4の場合では実質上それはゼロである。したがって、この分析からは縄文社会における土器様式圏と生殖ネットワークとの間の関係性の存在は検証できない。

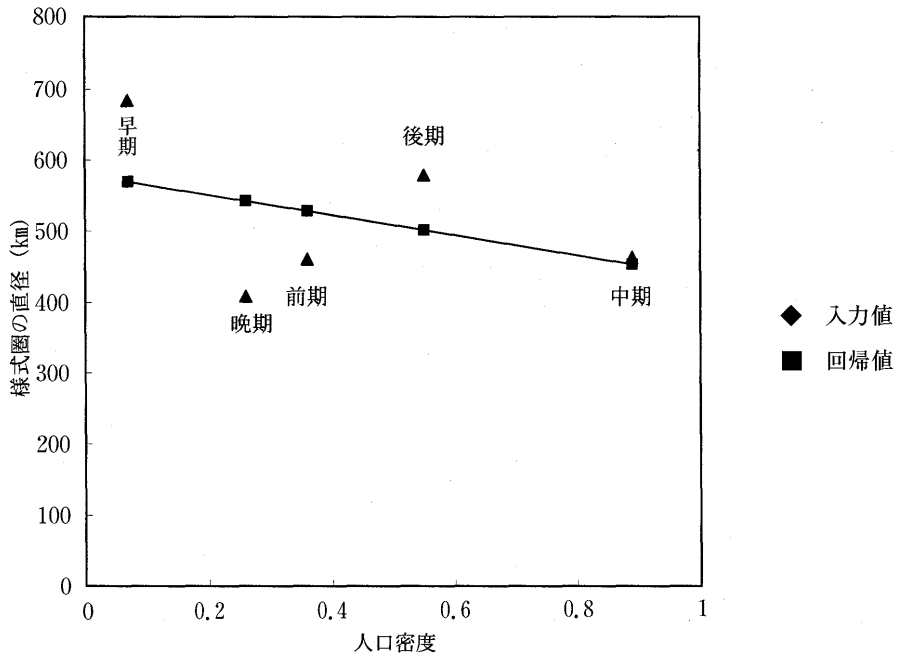


図3 縄文時代各期様式圏の直径の平均値と人口密度の相関関係

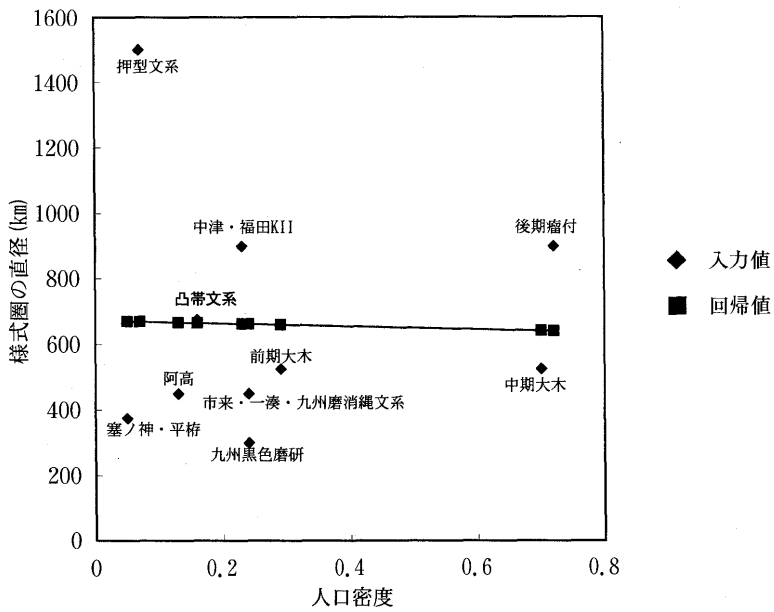


図4 10の様式圏の直径と人口密度との相関関係

## 4 考察

M. T. スタークは次のようなことを述べている。すなわち、北アメリカにおいて、「ニューアーケオロジストたちが金切り声を上げて物質文化研究を否定するのは、彼らがそのような研究を、記述が狭く、適切な理論的枠組みに欠けていると連想しているからである」(Stark 1998: 4) と。狭い記述と人間の行為に基づく理論的枠組みの欠如というこの2つの問題は、日本の考古学における大多数の物質文化研究者たちを特徴付けている。縄文土器の研究はその例外ではなく、いまだにその編年に焦点をあてたままである。しかし、縄文時代の結婚後の居住規制に関するいくつかの興味深い研究もある(例えば、春成 1979; 谷口 1986; 佐々木 1998; 山本 2000)。今回の分析はこれらの研究よりもっと大きな規模で行ったが、その結果、結婚後の居住規制は通婚距離と人口密度との間の基本的な関係にほとんど影響がないといえそうである(MacDonald and Hewlett 1999: 513)。この仮定は検証が難しい。しかし、民族誌的な事例には、そのような規制が必ずしもいつも実際に守られているわけではないということが示されている。例えば、R. キエストロムは、極地域においては、「経済的な柔軟性が最も重要なのであって、そのために居住パターンは厳密に規定されているわけではない」と述べている(Kjellstrom 1973: 108)。また、N. A. チャグノンはヤノマミの間で親族関係の規則がしばしば破られる理由について包括的な議論を提起している。

先史時代の婚姻行為の分析は数多くの諸問題に取り囲まれている。しかし、日本の縄文時代に関する膨大な物的証拠は、数多くの興味深い問題について、考古学者として我々が可能なかぎり分析する機会をたっぷりと与えてくれる。本稿での分析では『様式圏』と通婚ネットワークの間には関係性を見い出すことはできなかった。しかし、もっと小さい『型式圏』との間には関係性が見い出されるかもしれない。その仮説を検証するために、この種の分析がさらに続けなければならないだろう。

## 付 記

本論文の原文は英語であり、翻訳は編者が行った。



## 文 献

Cavalli-Sforza, L. L.

1999 Comment on MacDonald and Hewlett (1999). *Current Anthropology* 40(4), 514-515.

Chagnon, Napoleon A.

1992 *Yanomamo*. (4<sup>th</sup> ed.). Fort Worth: Harcourt Brace Jovanovich.

春成秀爾

1979 「縄文晩期の婚後居住規定」『岡山大学法文学部学術紀要』40, 25-63。

Hewlett, Barry S., J. M. H. van de Koppel and L. L. Cavalli-Sforza

1982 Exploration ranges of Aka pygmies of the Central African Republic. *Man* 17, 418-30.

Jochim, Michael A.

1976 *Hunter-Gatherer Subsistence and Settlement: A Predictive Model*. New York: Academic Press.

Kjellstrom, Rolf

1973 *Eskimo Marriage: An Account of Traditional Eskimo Courtship and Marriage*. Lund: Nordiska museets Handlingar 80.

小林達雄

1979 『日本の原始美術1 縄文土器 I』東京：講談社。

1984 「縄文時代領域論」『日本史学論集』上巻, pp.1-29, 東京：吉川弘文館。

1989 「縄文土器の様式と型式・形式」『縄文土器大観』4, pp.248-257, 東京：小学館。

1992 Regional Organization in the Jomon Period. *Arctic Anthropology* 29: 85-95.

1996 『縄文人の世界』東京：朝日選書。

1999 「土器と集団」『縄文土器の編年と社会』pp.74-76. 東京：雄山閣。

小山修三

1984 『縄文時代：コンピュータ考古学による復元』東京：中公新書。

MacDonald, Douglas H. and Barry S. Hewlett

1999 Reproductive Interests and Forager Mobility. *Current Anthropology* 40, 501-23.

Mandryk, Carole S.

1993 Hunter-Gatherer Social Costs and the Nonviability of Submarginal Environments. *Journal of Anthropological Research* 49, 39-71.

佐々木藤雄

1998 「縄文時代の土器分布圏と家族・親族・部族（下）」『先史考古学論集』7, 49-88。

Stark, Miriam T.

1997 Technical Choices and Social Boundaries in Material Culture Patterning: An Introduction. In M. T. Stark (ed.) *The Archaeology of Social Boundaries*, pp.1-11. Washington: Smithsonian Institution Press.

谷口康浩

1986 「縄文時代の親族組織と集団表象としての土器型式」『考古学雑誌』72, 1-21。

上野佳也

1986 『縄文コミュニケーション—縄文人の情報の流れ』東京：海鳴社。

Wobst, H. Martin

1974 Boundary Conditions for Paleolithic Social Systems: A Simulation Approach. *American Antiquity* 39, 147-78.

山本典幸

2000 『縄文時代の地域生活史』東京：ミュゼ。

Yengoyan, Aram A.

1968 Demographic and Ecological Influences on Aboriginal Australian Marriage Sections. In R. B. Lee and I. DeVore (eds.) *Man the Hunter*, pp.185-99. Chicago: Aldine.

